

Information for Constructors NetworkSE



第21回

私の家

スケッチ・文 建築家 三家大地

「三家ランド」

連載私の家は、建築家が1枚のスケッチを通して自邸を語る頁である。どのような思想に基づいてつくられた空間なのか、あるいは日々どのように過ごす場所なのか、写真ではないぶん、想像力を働かせ、読み込んでいきたい。
第21回は建築家・三家大地さんの事務所兼自邸である。東京郊外の、広大な緑地帯の一面にのめり込むように建つ。都市と自然の境界に棲み暮らすことについて綴ってもらった。

自宅にランドと名前をつけたのはふたつ理由があった。ひとつは、ランドとは、人間が建築も含めた大地に対する作務的な関わりを通じて地球と対峙する際に使う言葉だということ。もうひとつは、この計画が、自分の設計思想を実現するために始めたのではなく、家族や現場監理を担当した元スタッフなど挙げるときりがないほどさまざまな人との関係によって生まれ、しかもその根幹にあったのは常に、「生きる」という切実な思いであったからである。

土地探しは、徹底的に調べあげ、見て回った。そこで重要だったことは、今まで自分が設計したことのない、いい換えればすぐ設計できてしまわない、その場の環境と向き合える土地であること、だった。

見つけた敷地は東京近郊の天然記念物の森の傍にあり、森には人が入らず下草から高木、倒木までそのままあり、種類や樹齢の違う植物が雑多に混じり合う森であった。計画建物はその森に最大限面するように勾玉形状とし、森との距離を測りながら勾玉を出っ張り引っ込みさせて床をつくり、それによって必要となる柱や筋交を、その位置やサイズを綿密にスタディしながら配置していった。そうしてできた建物は、サイズの異なる柱や倒木のような筋交が乱立する、森で見た雑の様相を持つ骨格であった。訪れる人たちは一見不要とも思える躯体と雑多な家具が混ざる雑な状態を見て、引越してから数年経っているようだという。

1階は私の事務所である。最近その一角のソファスペースに子どもが友だちを連れて来て遊ぶようになり、筋交を挟んだ隣で私たちがさまざまな人々と打合せするとうような、訪れる人たちが建物内で混ざるようになった。人やモノが雑に混じり合う様相は豊かで、やはり家というよりランドという名が相応しいと、改めて感じている。

三家大地（みつや たいち）
1979年奈良県生まれ、2002年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業。2004〜2012年西沢大良建築設計事務所勤務。2012年三家大地建築設計事務所設立。現在に至る。



巻頭インタビュー

住む人によって「育てられる」家がいい

山田節子（コーディネーター）

SE構法の実例

ノバシステム淡路島保養所

設計：吉永規夫 / Office for Environment Architecture
施工：株式会社ツダ

AGING WELL SHOW HOME

設計・施工：株式会社野澤工務店

木造の21世紀を考える

石上純也 建築家

私の家

三家大地 建築家

VOL.
187

May. 2023

エコノミストが寄せる 日本経済への期待とSE構法の時代

今年の3月で91歳になりました。毎朝スクワットと体操、一日おきに筋トレの真似事と犬の散歩、週に2日は山歩きをするので足腰には自信がありましたが、このところ腰痛で立ち姿勢がつかなくなり、階段の昇り降りにも支障をきたし、そろそろ年貢の納めどきかなと思いはじめています。

さて、コロナはどうやら収まりそうですが、ウクライナへの軍事侵攻は長期化の様相です。そして最近のメディアは、景気の先行きについて、不透明で悪いインフレの兆候があり、世界的な景気後退が始まったという論調ですが、一部のエコノミストたちはたいへん明るい日本と世界の未来を語っています。

それによると、中国の台頭によって、バックス・アメリカナ、つまりアメリカによる世界経済の支配が終わる一方で、米中摩擦は中国を世界の工場というポジションから引きずり下ろし、そこで東南アジアとEU諸国をそれぞれ自国のサプライチェーンに組み込んだ日本とドイツが、中国に代わって再び世界の工場の中核になるという説です。

すでに製造業の国内回帰は始まっています。外資系では熊本県のTSMC(台湾積体回路製造)半導体工場、千葉県のグーグルのデータセンター設置などが、投資先を中国から日本へ振り替えてきたのです。

考えてみれば、日米貿易摩擦が激しかった1980年代中盤から1990年代初頭においてさえ、世界はアメリカの一極支配が続いていた時代でした。日本は叩かれ、叩かれては譲歩を重ね、歯を食いしばって生き延びて成長を続けてきました。

いま中国は、一帯一路、アフリカなどの新興国への経済援助、ロシアとの連携などで西側経済圏に対抗するもうひとつの経済圏をつくらうとしています。世界の政治経済は二極化に向かっていきます。アメリカでさえも同盟国の協力がなければ対抗できません。日本の存在がアメリカにとって再び重要になることで、わが国にとってよい流れが生まれてくることに期待しましょう。

いま住宅業界はたいへん厳しい状況ですが、日本経済には明るい未来が見えています。メイドインジャパンが世界を席巻した輝かしい時代が再現するかもしれません。そうなれば住宅も非住宅も木造化の波に乗って、活況を呈することになるでしょう。

どんなにづらい時でも希望を持つことが大事です。夢と希望があつてこそ人と企業は成長できるのです。

身近なところでは、2025年建築基準法の改正が期待されます。現行法で4号の条件に適合する木造2階建て以下、高さ13m以下、軒高9m以下、延床面積500㎡以下の建築物は、2号または3号に区分されることになります。さらに、300㎡超の建築物は許容応力度計算が義務化されます。

SE構法の時代がやって来ます。30年越しの夢が実るまであと少しです。頑張りましょう。

参考文献『何をしなくとも、勝手に復活する日本経済』上田司著/『大インフレ時代!日本株が強い』エミン・ユルマズ著

株式会社エヌ・シー・エヌ 取締役会長
杉山恒夫

耐震構法
SE構法

住む人によって 「育てられる」家がいい

聞き手:橋本純、長井美咲/文:長井美咲/写真:栗原論(p.5下2点以外)



コーディネーター

山田節子

SETSUKO YAMADA

山田節子さんは、日本人が古くから大切にしてきた「心や技、美意識、生活観」を、現代に活かす生活提案の仕事で永年手がけ、コーディネーターとしてさまざまな「もの・人・場」をつないできた。日々の暮らしが豊かであることをなにより願うその目に、日本の住宅はどう映るのか。東京郊外の自宅にお邪魔して話をうかがった。

食器の種類や数の多さは日本の豊かな生活文化の現れ

— ご自宅は建築家のご主人が設計されたそうですね。建ててからどれくらい経つのですか？

山田 築40年ちょっとです。当時は住宅をコンクリートでつくる例はあまりなく、また、屋内の寒暖差を少なくするため外壁から基礎まで外断熱をして、いろいろな意味で実験住宅でした。

— 築40年以上とはとても思えません。メンテナンスの賜物ですね。そして、実にすっきりと暮らしていらっしゃる。

山田 双子の息子が小さいころ、わが家に泊まりがけで遊びに来たお友だちが、帰宅後に「道路のような家で寝た」とお母さんに話したものですから、どんな家か見当がつかないお母さんたちが一度見せてくださいと集団で見に来られたことがあります(笑)。子どもの表現って面白いですね。仕事柄、食器をたくさん持っていますので、台所まわりの壁面はすべて食器棚です。ちょっと開けてみましょうか。

— わあ、ぎっしり入っていますね。でも整理整頓されているから、どこになにがあるかが見やすい。食器棚の奥行きはどれくらいですか？

山田 居間側は45cm、台所側は30cmです。設計当時、わが家にあった食器を見て主人が決めました。これくらいの奥行きだとだいたい全部、奥に仕舞ってあるものも見えます。私たちは家を建てるお金が潤沢にあったわけではないので、自分たちの裁量で選べる最善の素材でどこもかしこもつくりました。食器棚は丈夫でたくさん入ることがいちばん。多いときは30人くらいのお客様もお迎えしましたから食器も少々の数では足りません。でも数が多いといって、ぎっしり詰め込みすぎても、使い

勝手が悪くなるばかりです。食器の寸法はだいたい決まっていますから、種別ごとにちゃんと分類して入れていけば収まり、混乱しなくて済みます。そして素材別に分類して、たとえば陶器・ガラス・木製品はここ、と決めています。

私は使うことを基本的に食器を買いますので、ありがたそうに取っておくだけということはありません。なかには貴重な食器も平気な顔をして入っています。飾り皿などもありますが、棚の高いところに入れてあります。重箱のように日常的に使わないものもね。台所側の食器棚には日常使いするなかでも頻度の高いものを入れています。

日本はヨーロッパなど諸外国と比べても、各家庭が持っている食器の数量が並外れて多い。しかも、たとえば漆器ひとつとっても、いろいろな産地があります。食文化の道具に関してはすごく贅沢で、それが日本の生活文化の骨幹をなしていると思います。料理に合わせて、自分が選んだ好みの器を使い、食べ物に感謝していただく。「日々を丁寧に生きる」とは、そういうことの積み重ねですからね。そうした生活文化がよいかたちで後世に伝わってほしいと願い、東京の百貨店「松屋銀座」で半世紀近く仕事もしてきました。

「お茶を1杯進げるでな」

— フリーランスでずっとお仕事をされてきたのですよね。生活文化に目を向けるようになったきっかけは、生まれ育った家庭環境に関係があるのでしょうか？

山田 私は長野市で生まれ育ちました。祖父も父もジャーナリストの先駆けで、大正期には、屋間は銀行などに勤め、朝4時に起き、仲間とともに新聞を手づくりして配る。それが地方新聞の夜明けだったという家系に育ちましたから、新しいことが好きでお節いな家系だったのではないのでしょうか(笑)。

そんな家系ですから、家には常に多くの人の出入りがありました。祖母と母はそれを上手に切り盛りしていたものです。お正月

山田さんの自宅は東京郊外の旗竿地に建つ。「この敷地を見て主人が『路地奥の家というのは上手につくれば住みよ』というので決めました」。路地奥の植栽は敷地奥の庭まで続く。住まいは鉄筋コンクリート造の2階建てで、1階は山田さんとご主人の仕事場となっている。玄関脇のちょっとした設えも、あるとないでは印象が大きく違う。



2階の居間や台所の食器棚のなかには食器がぎっしり。ただし大きさや素材別に分類されているので見やすい。お膳も棚板と棚板の間に立てて収めている(居間側の食器棚の左側、下から3段目)。棚板の高さは変えられる。上の写真は台所側の食器棚。

の三が日には入れ替わり立ち替わり多くのお客様があり、おせち料理も3段の重箱で10台分くらいつくっていました。したがって私たち姉妹は年末からおせちづくりを手伝われ、三が日もあなたは洗い場、あなたは盛り付け、あなたはお運びを、と母に役割を決められる。当時はどうしてこんな家に生まれたのかと思ったものです。

— でもそれで料理を身につけられたのですね。

山田 子どものころのことで今も忘れられないのは、飯田市にある父の妹の家で過ごした数年間です。地域でいちばんの旧家によく遊びに行ったことでした。その家には蔵が7つあり、菖蒲や蓮の花が咲く池があり、広大な裏庭には築山もありました。ご当主のお婆様は美しい田舎言葉をお話される方で、行くとき「ようおいでなさいましたな」と迎えてくださる。そして、たとえば私たちが遊んでいると、「今日はお客様がおいでになるで、蔵からお道具を運び出しますで、手伝っておくんしょ。さあ手をきれいに洗って、あとでお駄賃やるでな」といって子どもたちを集めます。お道具は夏と冬で用いるものが違い、「夏様」「冬様」と箱の表に書いて、蔵の中の置き場所も分けてあり、私はそれらのお道具を見るのが大好きでした。

「私がお道具を歩きますで、転ばぬようについておいでなっしょ」というお婆様の後について子どもたちが列をなして蔵からお道具を運ぶ。蔵は上がり框が高いから、「いいかな、上がっては下り、上がっては下りだけれども、転んではなりません。転んだら大変なものが入っております」と注意を促される。転ぶかもしれないし、手が小さいから、大切な食器の入った箱を落とすかもしれないけれど、「こう持ちますに」と手本を見せて持たせる。そして無事に運び終えると、「今日よう働いておくれたで、お茶を1杯進げるでな」と、お茶と手づくりのお菓子を出してくださる。子どもに対しても「あげる」とはおっしゃらない。「しなさい」という言い方もいっさいありませんでしたし、その家の子も、私のように遊びに来た子も、等しく丁寧に扱われました。

お婆様はそうやって、ゆったりと穏やかな日本の生活美学を子どもたちに自然に伝えていたのでしょう。私は思いがけずそれに触れることができ、幸せでした。昔は地方ごとに、このような生活文

化や美学が伝わっていたのですが、敗戦や高度経済成長などで途絶えてしまったのではないのでしょうか。

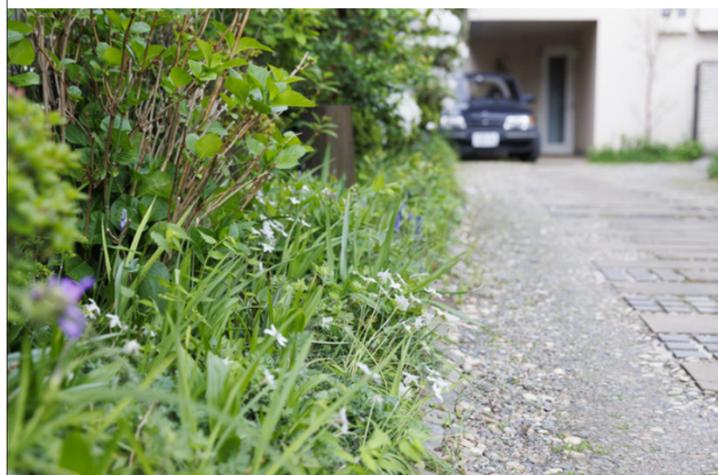
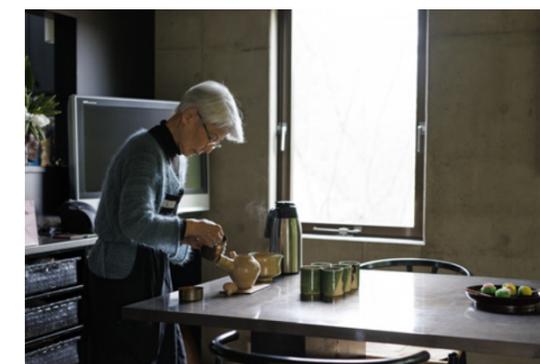
柳宗理の勧めでヨーロッパを旅して日本の文化を見直す

— 多摩美術大学への進学を機に上京されるわけですが、なぜ美大に？

山田 絵描きの伯父がいて、小さいときからその伯父がスケッチに出かけるという付いて行っていたので、絵を描いたり物をつくったりすることをごく身近に感じていました。漆器や陶器をつくる人の出入りもありましたし。多摩美では図案科に入り、2年生からは染織科に進みましたが、1年生の夏休み以降、仲間と益子に陶器をつくりに行っていたことがなによりの楽しみでした。益子では陶芸家の濱田庄司先生との出会いもありました。

4年生のときには親友に誘われて柳宗理先生の事務所に出入りし始めました。ある日、先生から「一度世界を見てから、なにをすべきかを考え、自分の道を開きなさい」という言葉とともに、ここに行くといい、あそこに行くといいとアドバイスをいただきました。父に話しますと、よい勉強になるだろうから行っておいでと許しをもらえ、1968年に3カ月半ほど、ヨーロッパをひとり旅しました。憧れのヨーロッパは、国ごとに優れた文化があり、行く先々で感激することの連続でした。ただしこの旅は、日本の文化を改めて見直す機会にもなり、私は日本の生活文化を土台に仕事をする

今年の夏に80歳になる山田さん。「なにが自慢かって髪は自分で切っています」。





階段の吹抜けと手すりを利用して、床の間に見立てた居間の一角。以前は吹抜けの壁に軸や書を掛けていたこともあるが、階段での掛け替えは大変なので、設えの仕方を変えたという。今は陶製パーツに花器を割り箸で引っ掛けて花を飾っている。山田さんは「裏で割り箸が働いているとは思わないでしょ。そのしなりが大切なんです」と話す。なんでも工夫次第だ。

のが自分に合っていると。子どものころより、日々の暮らしのなかで日本の伝統や風習を知らず知らずのうちに教わり、それがいかに貴重で大切なことだったかということを感じさせられました。

松屋銀座との出会いと展示の仕事

——松屋銀座との出会いはどんなところから？

山田 帰国後は先輩に声をかけられ、1970年の大阪万博に向けて某企業のパビリオンに置くオブジェをつくるプロジェクトを手伝ったのですが、肌にあわず、途中で逃げ出しました。そして、後輩ふたりとつくっていたオブジェを松屋のバイヤーに見いだし、「これは面白いね、売ってあげよう」と。「え？ 売りものじゃないんですけど」と応じますと、「売りものじゃないものを売りものにするのが百貨店のバイヤーだ」とのこと、松屋銀座とのご縁が始まりました。

松屋は7階に「デザインコレクション」があります。日本におけるデザイン啓蒙運動の場として立ち上げた1955年から今日に続き、デザインギャラリーとともに「デザインのメッカ」として歴史的にも評価されています。私が美大生のころも、定期的に松屋の展示を見に行かないと時代に遅れる、と先生方からもいわれる場であり、松屋はデザインの発信拠点でした。

——北欧デザインを日本にいち早く紹介したのも松屋でした。

山田 松屋は日々の暮らしを豊かにするという点において、当時より格別に意欲的であったと感じています。偶然にもそんな松屋とご縁が生まれ、1974年に当時の部長から「日本人の食器展」を企画してほしいといわれたのでした。そのころの日本は、海外志向が日ごとに高まり、大量生産大量消費の世の中へと変わりつつあるなか、部長の意図は「日本的な文化と西洋的な文化がぶつかる今、混沌とした食卓風景となり、食文化自体も簡便さだけを優先する流れになってきているなかで、この国が伝え残すべき生活文化をお客様にお伝えしたい」というものでした。

そこで、日本で育まれた美意識をベースに、変化するライフスタ

イルにもかなう、日常を豊かにする器を一堂に集めて展示会を開くことを目指し、飯椀、汁碗、箸、小皿、大鉢など、心あるつくり手につくってもらうために 各地を訪ね歩くこととなりました。

そして「日本人の食器展」は1977年の初開催を皮切りに、テーマを変えながら80年代半ばまで年1回開催された、かけがえのない仕事となりました。

住む人が手を入れられる余地があることは大切

——会津若松の仏壇メーカー「アルテマイスター」と、そのアンテナショップである東京・銀座の「ギャラリー厨子屋」の企業戦略や企画推進などにも関わっておられますね。

山田 「日本人の食器展」を重ねることにより、各地のつくり手とのご縁が育まれるなかで、会津若松の漆問屋「坂本乙造商店」からも相談を受けていたのです。漆器が使われなくなってくるなかで、「これから漆でなにをつくったらよいか」と。その坂本さんから、同郷のアルテマイスターのショールームのディスプレイを見てほしいと頼まれましたが……。それは1998年のことでした。ショールームはインテリアデザイナーの水谷壮市さんが手がけた神秘的で斬新な空間なのですが、そこに置かれている仏壇は昔ながらの大きなものばかりで、しかも今日の住空間や生活スタイルの変化にはまったく配慮のな



「日本人の食器展」を手始めに、山田さんは松屋でさまざまな企画催事や展示を行った。その広告写真から、左はステンレスという素材を器にどう活かせるかという企画のとき、右は風呂敷の便利さを見直すという企画のとき。

拭き漆の長持の上に置かれた赤い扉の厨子は、インテリアデザイナーの内田繁さんがデザイン。山田さんはアルテマイスターとの協業にあたり、コンセプトを「新しい祈りのかたち」に決めた瞬間に、そのもとも基本となる厨子のデザインを旧知の内田さんに依頼した。右側の写真は、お孫さんの“作品”を飾っている様子。お孫さんが「私の神様」として山田さんにプレゼントしたものを、陶芸家・造形作家の内田綱一さんの作品に置いて飾っている。



いまの大型仏壇が並び、違和感でその場に立ち尽くしてしまいました。

住まいのかたちもライフスタイルも変わってきているのに、なぜいまだに旧態依然とした仏壇をつくり続けているのかと、私に関わるような仕事ではないかと思ひ、帰ろうといたしますと、アルテマイスターの方たちから「どうしたらよいのか」と問われたのです。考えますれば、家族や大切な人を送り、祈りを捧げる場を設けることは、丁寧に生きることそのものでありますが、今日の日本の住まいの多くでは、大きな仏壇を置く余裕がありません。現代の暮らしにかなう「新しい祈りのかたち」が必要とされているのではないのでしょうか。

ならば、古より、大切なものや自分の守り仏などを納め置き、背負って旅にも出た「厨子」の古事にもならない、現代の暮らしや気持ちにかなう「現代の厨子」をご提案してはいかがかと。

基本となる厨子のデザインは、インテリアデザイナーの内田繁さんをお願いしました。内田さんとは永いお付き合いで、すごく忙しい人でしたから、夜中に電話で打合せすることも多く、お願いすると最初はだいたい「そんなものはできないよ」というのです。このときもそうでしたけど、あなたは天才だからできるわよ、と。翌朝、デザイン案がファックスで届いていました。伝統は大切にすべきですが、昔からのかたちにこだわるのではなく、それぞれの人にとって、今どうあることがよいのかを考えていかなければなりません。住宅もそうですよね。四角四面にそれらしいかたちをつくっても、暮らしにくければ意味がありません。住む人が手を入れられるところ、あらかじめしっかりつくっておくところ、その両方があることが家づくりでは大切なではありませんか。地震雷火事親父ではありませんが、やはり地震から守ってくれる住まいがいいですし。

——山田さんのお宅では、アルテマイスターの厨子を長持の上に置いておられます。

山田 この長持は曾祖母の嫁入り道具で、代々使った後、もらい受けました。子どものころに「これは私がもらう」と宣言し、かくれんぼにも使っていましたから。居間の一角に置いてある漆塗りの文筆筒も実家からもらったもので、やはり小さいときから「これは私のもの」と言っていました。文筆筒は父が大切なものを入れて使っていました。階段吹抜けの壁には陶製のパーツを3連にしたものを吊るし、そこに花器を掛けて庭の花木や草花を生けています。家のなかに季節の設えがあるだけで、心が休まりますでしょ。居間と隣室の

間のドアには、私が柿渋で染めた和紙を経師屋さんに貼ってもらいました。コンクリートの冷たさや味気なさを消したいと思って。家はこのようにして住む人が思い思いに育てられるとよいですね。そのためには住む人が自分の手を加えられる余地が家にあることが大切で、そこから温もりのある生活文化が受け継がれたり、新しい暮らしのかたちが生まれやすくなるのではないかと思います。すべてがつくり込まれてると、住む人も手を出してはいけないのではないかと感じてしまうかもしれませんから、ここはお住みになった方の好みで手を入れてくださいという部分をあえてつくってはいかがですか。

——「家を育てる」というのはよい言葉ですね。奥の部屋の壁に飾っているのは、お孫さんがつくったものですか？

山田 そうです。これは孫が私の神様だよといってプレゼントしてくれたので、陶芸家・造形作家の内田綱一さんの作品の上に置いています。ぴったりでしょ。その下のもの孫が割り箸に刺して持ち歩いていたので、婆ちゃんが飾るねといってもらい受けました。子どもの落書きのようなものでも、こういうことにより家が人を育て、人が家を育てる楽しみでもあり、幸せではないかと思うのです。丁寧に生きるということも同様。私は幸運にも、さまざまな人との出会いやつながりに恵まれ、生かされてきたという思いがいたします。忙しさに流されず、ほんの少し丁寧に生きてみる、そんな時間の積み重ねこそ大切な時代なのではないでしょうか。



山田節子（やまだ・せつこ）株式会社トゥイン代表、山田節子企画室主宰。1943年長野県生まれ。1966年多摩美術大学卒業。1967年デザイン工房「フリュード」設立参画。1974年山田節子事務所設立。1988年株式会社トゥイン設立。商品企画・店舗企画・展覧会企画・企業戦略立案推進などを通じてライフスタイルを提案し、「もの・人・場」のプロデュースを手がける。

ノバシステム淡路島保養所

設計：吉永規夫 / Office for Environment Architecture

施工：株式会社ツダ

写真：杉野圭

文：橋本純

SE構法の実例



研修ホールから西側に広がる瀬戸内海を望む。左右8,645mmのワンスパン。正面の開口部の寸法は6,375mm×3,950mm。その両端の袖壁は幅910mmで、それぞれ120mm×240mmの平角柱4本で構成されている。左手の山桜は既存樹木。

水平線を掴まえる窓

淡路島の西海岸、眼下に広がる瀬戸内海への眺望を楽しむために、
いくつかの大開口が連続する架構がつけられた。



上：研修ホールを見る。右手にエントランス、リビングが連なる。研修ホールとエントランスの間の開口部は幅5,100mmで、5枚引きのスティール製引き戸（サンワカンパニー製）がはまる。その上部には成750mmの大きな梁が架かる。

右：リビングを見る。天井高は2,800mm。正面奥にはキッチンが設けられているが、大人数の研修会などへの対応として、裏側のパントリー内にもキッチンが設けられている。

右頁左下：キッチンカウンター越しに研修ホール方向を見る。

右頁右下：リビングからテラス、インフィニティ・プール越しに瀬戸内海を望む。歩いているのは設計者の吉永規夫さん。



「ノバシステム淡路島保養所」は、ノバシステム株式会社が、兵庫県淡路島に建設した社員厚生施設である。設計を担当した建築家の吉永規夫さんにお話をうかがった。

西海岸という立地

ノバシステムは、1982年に大阪で創業した業務系システム開発を基幹とする企業である。現在は大阪と東京に本社を構え、社員数は480名（2023年4月現在）、特に金融・保険領域のシステム開発を得意とする。

同社が保養所を建てるのは、これがふたつ目である。先行して神奈川県箱根につくったところ、東京本社の社員に積極的に使ってもらえたことから、大阪本社の社員利用と、淡路島でのITプログラミング技術を通じた地域社会貢献を想定して、この地に新たに保養所をつくることにした。

敷地は兵庫県洲本市の西端、淡路島南西部の瀬戸内海を望む高台に位置する。南側は五色浜リッチランドという古くからある別荘地に接する。西海岸は瀬戸内海からの海風が強く、地元の人たちは、生活立地として大阪湾に面した東海岸を選択することのだが、瀬戸内海に沈む夕陽の魅力が別荘地としての評価を与えた。この敷地

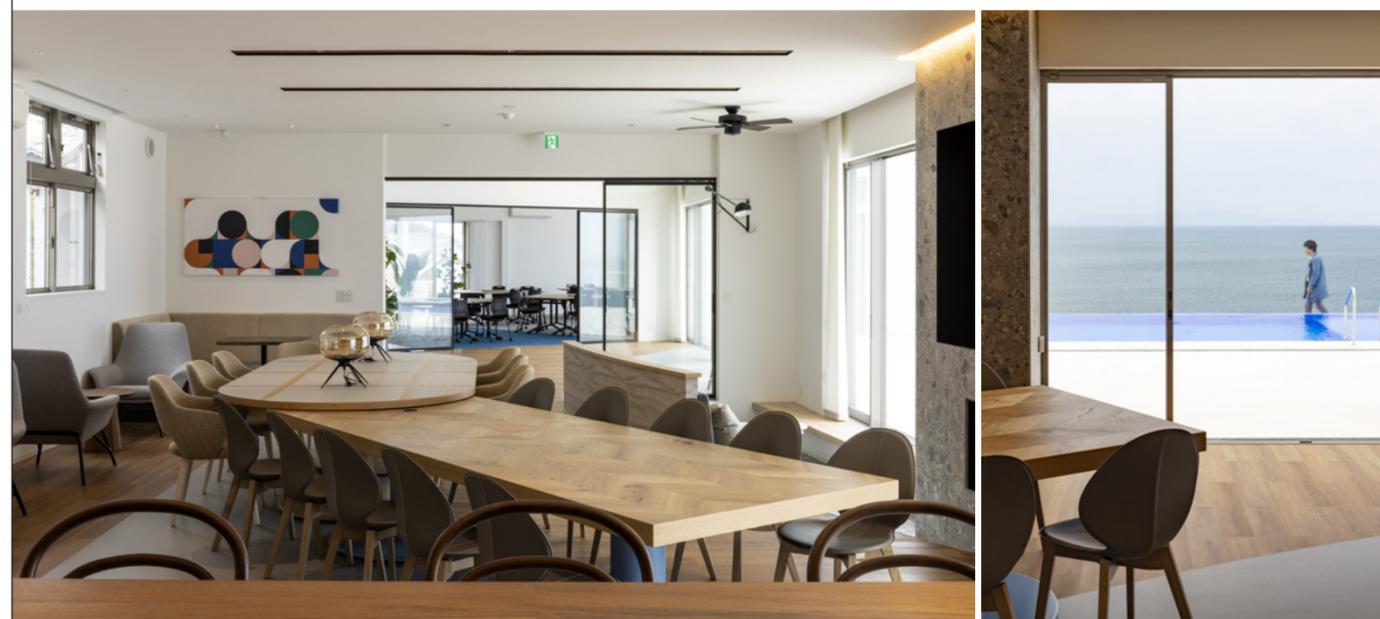
も、もともとは別荘地として造成された場所らしく、地籍図上は区画され登記もされていたが、その後は開発が進むことなく放置された状態で、土地取得時は草木の生い茂る森のような状態だった。

6段に雑壇造成されていて、最下段から少しずつ土地の購入を進めていったため、保養所をつくることは決まっていたが、最初からはっきりとした建物規模や配置計画が描けていたわけではなく、現在の最上段の建物配置も、そこへのアクセス路が購入できて以降の決定である。その一連の過程を吉永さんは設計者として併走し、提案を続けた。

工作好きな建築家

吉永さんは、大阪に「Office for Environment Architecture」という事務所を構える新進気鋭の建築家で、長屋のリノベーション「ヨシナガヤ」の連作で知られる。彼の妻は「キドビル工務店」という名前の工務店を営んでいる。それぞれ独立した事業主体だが、これまでの吉永さんの設計はほぼ妻が施工を請け負っている。こうしたマイクロゼネコンとでもいえるような体制をとる建築家は最近増えつつあるが、夫が設計で妻が施工という事例はめずらしい。

吉永さんは、週末は仲間を募ってリノベーションなどの大工工事で





左上：2階宿泊室を見る。
 右上：東側より俯瞰する。下段に見えるのは建設中のコテージ。
 左：西側から見る全景。

汗を流すという。平日はデスクワーク中心の設計業務、週末は大工仕事という働き方はとても健康的になれるとのことで、将来的にはもう少し施工に携わる時間を増やしたいともいう。工作が好きな建築家なのである。

吉永さんは木造が大好きで、この保養所を木造でつくりたいと考えていた。建物規模や内部空間のスケールから、クライアントは木造以外も視野に入れていたようだが、SE構法ならばこの空間を安全性や経済性を踏まえうて実現可能であることを説明し、実現に至っている。

瀬戸内海を望むピクチャーウィンドウ

建物は南北に長く、瀬戸内海への眺望を重視して西側に開かれた配置である。別荘地に南接するため、プライバシーや音漏れを考慮し、南側に平屋だが大きな空間を持つ研修ホールを壁のように配置した。その北側に2階建てでリビングや宿泊室の入る棟が角度を振って接続する変形T字形平面である。

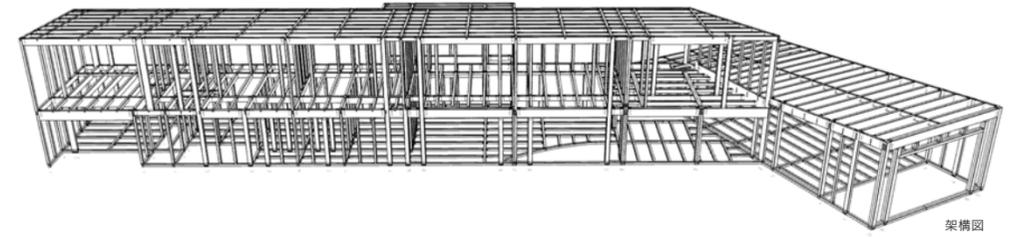
もっとも大きな空間はその研修ホールで、8,645mm×13,650mmの無柱空間である。天井高さは東端が2,805mmで西側に向かって高くなり、最大で5,040mmになる。西側では床レベルを900mm下げ

ているが、これは西下がりの敷地形状による。盛り土されていたが、その一部を削除し耐圧盤のレベルを下げ、一方で基礎の立ち上がりを大きく取り、上端を東側とそろえ、同一構面とした。

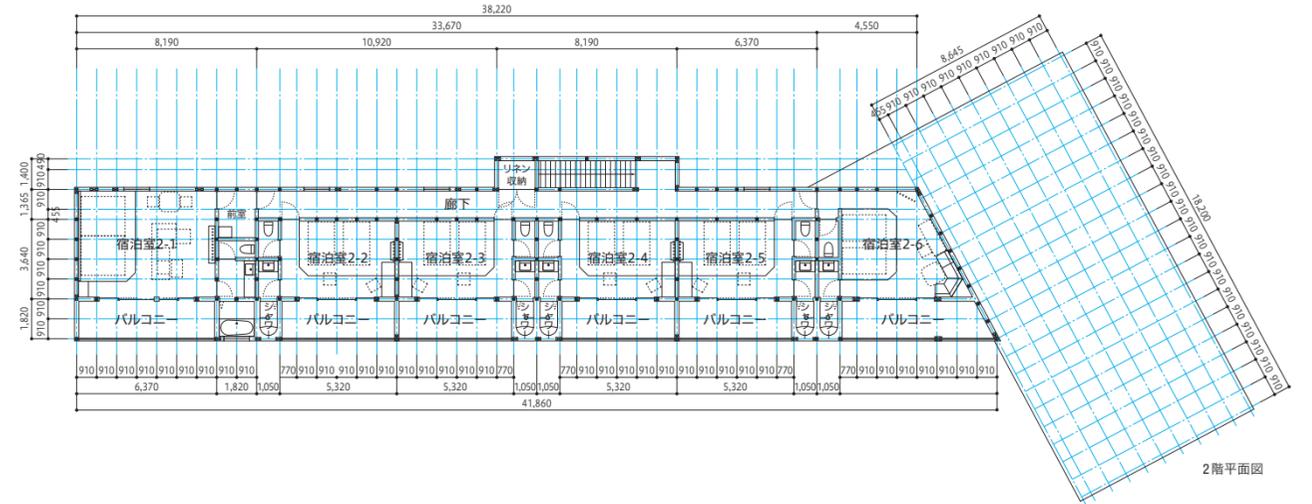
西面には間口6,375mm高さ3,950mmの開口を開け、瀬戸内海を望む大きなピクチャーウィンドウを設けた。左手に見える山桜は、この造成地が放置されていた間に自然に生えたもので、吉永さんの提案でこの場所に残すことになった。生きた土地の履歴である。そしてこの山桜越しに望む瀬戸内海の景色は魅力的である。

この研修ホールから北に、エントランスを介して、リビング、パントリー、更衣室、浴室、宿泊室が連なる。2階はすべて宿泊室である。リビングには大きなテーブルが置かれているが、ダイニング利用に加え、ここでも研修を行うことを想定している。そのリビング部分には天井高2,800mm階高3,935mmで、層間を1,135mmとたっぷりとしている。宿泊施設ゆえ防音に配慮するだけでなく、成530mmの梁上に450mmの2階床下スペースを設け、設備配管をそこに納めている。

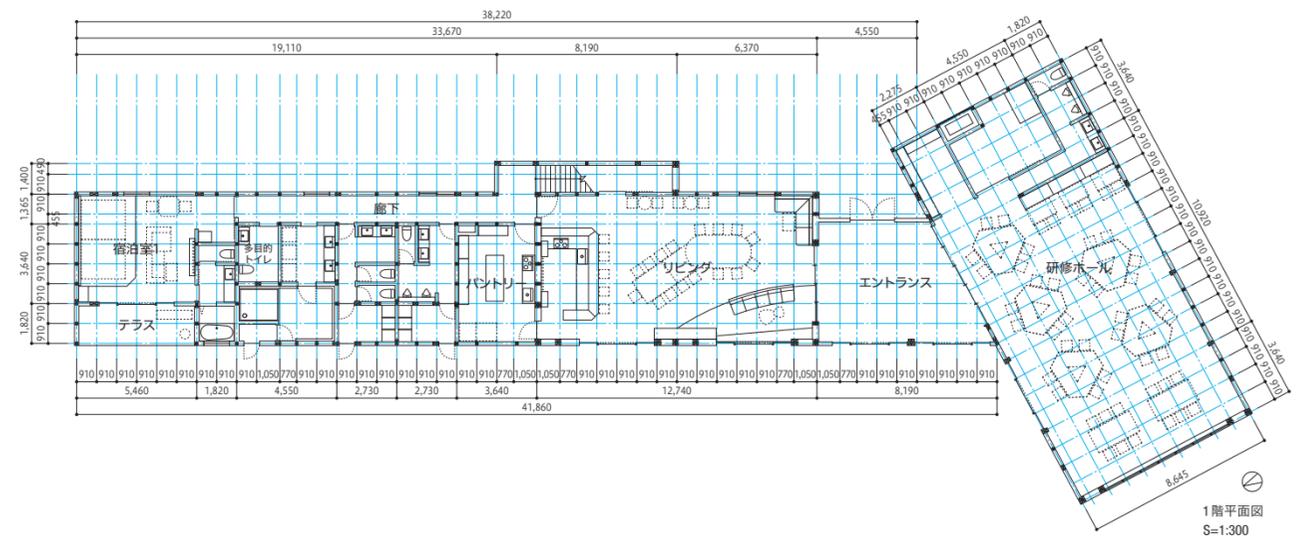
西側には大きなテラスを張り出し、その先にプールを置く。テラスは1FLと面一で連続する。眼下の景色を切り取って瀬戸内海の水平線を強調する。瀬戸内海の景観を最優先した設計となっている。



架構図



2階平面図



1階平面図
S=1:300

建物名称 ：ノバステム淡路島保養所 所在地 ：兵庫県洲本市 主要用途 ：寄宿舎 建主 ：ノバステム株式会社 設計・監理 建築：Office for Environment Architecture 担当者名：吉永規夫、北野勝己 構造：株式会社エヌ・シー・エヌ 施工 施工：株式会社ツダ 設備：中田水道工業株式会社 電気：株式会社谷電気 内装：株式会社デザインアーク 外構・造成：入谷緑化土木株式会社	敷地条件 用途地域：都市計画区域外 防火指定：指定なし 道路幅員：南側5.46m 駐車台数：10台 構造・構法 主体構造・構法：SE構法（木造軸組構法） 基礎：ベタ基礎、一部地盤改良	規模 階数：2階 軒高：8,600mm 最高高さ：8,800mm 主なスパン：6,825mm、8,645mm 敷地面積：2,213.35㎡ 建築面積：446.95㎡（建蔽率：20.20%） 延床面積：646.93㎡（容積率：29.23%） 1階：424.63㎡ 2階：222.31㎡ 工程 設計期間：2020年5月～2022年7月 施工期間：2022年7月～2023年2月	設備システム 空調 空調方式：個別空調 熱源：電源 衛生 給水：公共上水道直結方式 給湯：ガス給湯器 排水：浄化槽 電気 受電方式：直接引込み 防災 消火：消火器／自動火災報知器／誘導灯／非常用照明 排煙：自然排煙
--	--	--	--

木造の 21世紀を 考える 46



建築家
石上純也

突き抜けた未来

石上純也さんの建築は、しばしばExtreme=極端な表現、として見られることがある。しかしインタビューを通じて語られた言葉は、建築とはいかにあるべきかを問い続ける強靱な思考力の先に見いだされた、正統な、あり得べき未来のひとつの姿を語るものであった。

聞き手・文：橋本純、久留由樹子

①「House & Restaurant」。地面に穴を掘り、コンクリートを流し込んで、型枠に見立てた土を掻き出すことでコンクリートの躯体を建ち上げている。躯体に付着した土は脱型後の判断でそのまま残された。右手はレストランのホール。

②KAIT工房。サイズの異なる305本の鉄骨柱からなる約2,000㎡の平屋。

すべてを建築としてつくること_レストランのためのテーブル

独立して最初の仕事のことからお聞かせください。

最初の仕事は「レストランのためのテーブル」(2005年)で、実は独立前でした。クライアントが実家のある山口県に帰って店を開くということで内装を頼まれたのです。でも当時僕はまだ妹島和世建築設計事務所 で働いていたため、現場監理ができるだけ少なくてすむような方法を考える必要がありました。また、僕自身の最初の作品にもなるので、インテリアデザインというよりは建築家として建築の設計をしたいとも考えていました。そのようないくつかの理由から、レストランで多くの人が多くの時間を過ごす場所はどこのか、レストランとしての機能において重要なところはどこのだろうと思考を巡らせました。そのなかで、テーブルというものに惹かれる感覚がありました。一般的にはテーブルは家具ですが、天板が屋根のように見えたり、脚が柱のように見えたり、なにか小さな建築のように感じるようになりました。テーブルならもしかしたら建築と同じように考えられるのではないかと思うようになったのです。構造計算をして鉄骨造の建築として鉄骨業者をお願いしてつくる。そうすれば、東京で監理もできます。そのようにして、「レストランのためのテーブル」では、構造事務所との協働で極限まで薄くした面と細くした柱として作り、レストランの空間を敷地として考えて配置計画を行い、その結果、「建築」として設計できるのではないかと思ったわけです。東京都現代美術館で展示した「四角いふうせん」も、美術館の展示空間が建築の敷地だと考えれば、風船のように浮かぶものを建築として解く試みとして思考できると考えました。今思えば、実際の建築の仕事はまだ少なかったで、どのようにしたら、どのプロジェクトにおいても建築の可能性について考えられるかを僕なりに模索していたように思います。

プログラムを根拠に建築をつくらない_KAIT工房

2008年に竣工した「KAIT工房」についてお聞かせください。

「KAIT工房」は、「レストランのためのテーブル」のすぐあとに独立して最初にスタートしたプロジェクトです。当時、僕のなかでは、そのころの妹島さんがやっていたような建築を部屋という箱の集合体として考えていくことに少し疑問を持つようになっていました。各部屋にそれぞれ与条件からのプログラムを与え、それらを組み合わせるような方法です。

建築の持続性を考えたとき、プログラムあるいは機能を根拠につくり上げてしまうと、使われ方が変わったときには、建築家が考えた理念は継承されにくい。いい換えれば、プログラムに則ってボリュームを定め、壁を立ててその空間を囲って箱として並べたとき、その設計の根拠は持続するのか、ということです。

なので、どんなに使われ方が変わったとしても、そこに建築家の理念が残るようなつくり方はあり得るかを考え、プログラムに依存しすぎるのではなく、とはいえ、与条件を無視するわけにはいかなないので、与えられたプログラムや機能に「曖昧性」を含ませることを主眼に考えていけば、与件を満たしながら、未来への可能性に対して幅と柔軟性を見いだすことができるのではないかと考えました。建築家の強い意志や意図がありながら、それらが見えづらい状態

をつくることを目指して、一見ランダムに感じるような305本の細い柱が林立する無数の空間を含むような建築を計画したいと思っていました。

都市に新しい植生をつくる_ヴェネチアビエンナーレ2008

「ヴェネチアビエンナーレ2008」は、吉阪隆正さんが設計された日本館の周りに4つのガラスの小さな温室という建築的覆いをつくり、それらがつくり出す微妙な気候の違いが、植生を通じて現れています。ここで意図したことについてお聞かせください。

2000年代初頭から環境問題が社会全体の共通認識となりつつありましたが、建築界にはその課題に建築表現の問題として真剣に取り組もうという意識の高まりが感じられなかった。環境への建築的取り組みがなかったのではなく、それがどこか設備的で、建築の歴史的文脈にどううまくおさまっていないように感じていました。これまでの建築表現の流れのなかでは捉えづらかったのだと思います。

ですが、社会問題として重要度が増してくることはわかっていたので、今までの建築の文脈を引き継ぎながら環境問題に取り込む方法を模索したいと思っていました。設備的で付属的な重々しいものではなく、もっと建築全体の印象に関わるような、軽やかに感覚に働きかけるような方法を考察したかったのです。そこで僕は植生やランドスケープを建築と同じくらいの重要度で捉えようと考えました。建築を構築していくことと同時に、人間の活動の外にある植生やランドスケープを建築として捉えて、その両者を軽やかに融合させていく。そういう感じで考えていけば、建築の集合体としての都市の考え方も刷新していくきっかけになるように思い始めていました。このような方向性は、その後の僕の建築の大きな関心事になっていくかもしれないという思いがありました。

外部的であり内部的であること_KAIT広場

「KAIT広場」は、緩やかな勾配をつけた広場のような場所に、穴を開けた鋼板の薄い屋根を架けた建築ですね。

「KAIT広場」は竣工は最近ですが、「ヴェネチアビエンナーレ2008」と同時期に考え始めていて、環境に対する意識が芽生え始めてきたころの提案です。植生やランドスケープと同じように環境を建築として捉えるからには、環境というものを、建築の外側を取り囲むものとして考えるのではなく、建築の内側にも存在するものとして扱えないかと思っていました。つまり、建築をつくることを、建築の内側に単に内部空間を生み出すこととして考えるのではなく、建築の内側に新しい外部環境をつくり出すこととして捉えて、その建築的可能性を探求していけないといけないのではないかと思うようになっていました。そう考えていたので、外のように広い平面なのに住居のなかのような天井の高さのプロポーションであったり、天気によって建築のなかの景色が変わると同時に、どんな天候であっても床が乾いているなど内部としての快適性も備えているような、もっと、





環境というものに外部的性質とともに建築的内部性を与え、それを実現しようと思いました。

空間をつくらうとしないこと House and Restaurant

「House and Restaurant」では、地面を掘削したような空間をつくっていますが、このような空間をつくらうと考えた経緯をお聞かせください。

このプロジェクトは「レストランのためのテーブル」と同じクライアントで、彼からは、テーブルのときのような空間に現代性を求めるのではなく、むしろ、昔からあるような雰囲気のある建築であって欲しいといわれました。それは彼の人生観が成熟してきたことにも関係していると思います。

同時期に秋田でグループホームを曳家で作る計画が動いていたのですが、その曳家する民家を毎週のように探しているときに「House and Restaurant」のアイデアを思いつきました。民家っていいなと思って見ていたのですが、そう思う理由をずっと考えていました。その魅力は自分ではどうしてもつくり出すことができない、いわゆる建築的意思とは少し距離がある要素になにか関係しているのではないかと思います。年月を経て古びていたり、使い手がなにかしらか傷をつけたり汚したりしたような、いってみれば、建築的計画性を超えた環境を含んでいるような、そういうものがよいのではないかと思うようになったのです。そうすれば、昔からあったような雰囲気が自然と生まれるのではないかと。

洞窟という建築の初源的な形式を現代建築として実践しているようにも見えます。

僕自身は洞窟という言葉を用いたことは一度もありません。僕は、岩をつくるように建築をつくるか、岩のような建築と表現していました。洞窟というと空間的な性質や特徴を含む感じがしますが、ここでは、空間をつくるための建築的操作をしたのではないのです。当時僕は、建築の軽さや透明性の追求といった建築表現の方向性に限界を感じていたため、そこから離れようとしたら、「空間としての建築」をつくるという思考自体を変えなくてはダメだと思っていた。なので岩という物体が現れてきたら、そこにたまたま空間が含まれているという具合に、設計をしようと思いました。

新しさと古さ、人工と自然

「ポタニカルガーデン水庭」はどういった意図で設計された庭でしょうか。

宿泊施設に隣接した敷地で、最初の要望は貸し農園でした。宿泊者が農業体験を通じて食材や食文化について考えるきっかけづくりができる場所をつくりたいということでしたが、大半の時間は農家の方々に管理を任せるわけで、それが僕にはテーマパークのように思えて違和感を感じました。

いろいろ話していくなかで、貸し農園から徐々に本格的な庭になっていき、その過程で、ランドスケープデザインについて考えるように

なりました。ランドスケープの設計は、どういう種類の樹木や草花をどこにどう配置で植えていくかというゾーニングの段階からどうしても先には進んでいけない。最終的に敷地に来る樹木や草花が具体的にはわからないからです。建築もゾーニングから入りますが、プランニングを経てディテールを具体的に詰めていき、建ち上がるものなので、思考過程がだいぶ違う。どうやってランドスケープで建築の設計と同じように具体性のあるスタディができるのかを考えていたとき、隣地の森を切り拓きホテルを建てる計画が立ち上がりました。そこで、その森に生えている樹木を切り倒すのではなく、すべて移植することにしました。1本1本実測をすれば、実際に使う木のかたちが正確に分かり、ゾーニングレベルではないランドスケープのスタディができる。実測した樹木を、樹形やどのような状態で葉がつくのか具体的に図面化・模型化して考えていき、建築の設計のときと同じいつもの僕のやり方でランドスケープをデザインしました。ただ樹木は生き物なので、いつかは置き換わっていくものです。ランドスケープのなかで時間とともに置き換わっていくことを許容するのであれば、なにかしらそこに構造が必要なのではないか。そこで、樹木の間にたくさんの池を敷地全体に計画しようと思いました。池は土を掘ることによってできあがるので、ある意味、構造物です。構造体ができあがれば、樹木や草花が置き換わっていったとしても、その風景の原型は維持されます。また、この敷地は、50年ほど前は水田だったこともあり、隣の川から水を引き込む水門なども残っていたのでそれを利用しました。風景という常に動いている環境に対して、構造という不動の要素を取り込むことによって、風景のなかになにか建築的永続性を備えたいと考えていました。

石上さんは、人工物と自然の境界はどのようなものとして意識されていますか。

「House and Restaurant」を考えたときもそうでしたが、新しさという概念に対峙するものとして、自然という概念があると思っています。建築で新しいということは、具体的にはすべてが人工でつくられた状態を意味するのではないのでしょうか。その後徐々に風化という変化を経て朽ちていき、最終的にはランドスケープに戻っていく。その状態が自然です。古い建築というのはその中間くらいにある状態なのかなと思います。人工と自然とある程度の距離感で取り込んだものといえます。そう考えると、人工と自然の境界線を繋げていく、あるいはなにかしらかのかたちで共存させていく行為は、時間軸でいうと人の手から離れる部分を含んだ古いという感覚に繋がるもので、それは人間の時間的なスケール感を超えた歴史的な感覚や、もっと大きな環境を含む状態になってくるように思うので、その両者の距離感の取り方を最近では特に意識しています。

建築の内側にそとをつくる

石上さんは、「森は、無数の環境が無数の『そと』とともにある世界である」と述べていますが、これはどのよ



うなことを意図した言葉だと理解すればよいでしょうか。「そと」や森という言葉の意味するところともにお聞かせください。

先ほどお話しした通り、「KAIT広場」のころから、建築の目的のひとつとして、内部空間をつくるということに疑問を持ち始めました。環境問題を現在の流れで突き詰めていくと、建築はどんどん閉鎖的になっていきます。断熱性能や気密性能、温湿度などの基準が定められ、内部環境の均質化が求められて、建築を自然界から切り離していく傾向が加速しています。

でも本来建築は、外部環境と共存していて、周辺の環境も含めて成り立っていたはずだと思うのです。そう考えると、建築の内部環境も時代や地域性によってまったく異なっているはずで、いろいろな環境条件があって、そのことによって多様性や場所性を高めていくべきだと思います。温度湿度が各部屋で違っていたり、極端にいうと、建築の内部に水が入ってくることもあって、さらにいえば人間だけの空間になっていなくてもよいのではないかと。むしろ、そういう状態で人間が快適だと感じる環境を備えることが、建築の本質を考えることなのではないかと思っています。環境負荷を抑えることが必ずしも、唯一の方法ではないと思うのです。たとえば、一般的な空調システムを使うことを前提にすると、限られた方法しかなく、どの建物も同じ均質な内部空間になります。もう少し建築の内部を複数のシステムが共存する環境だと捉えて建築をつくることを考えられたらと思っています。それは建築の内側に新しい外をつくるというふうにもいえるのではないかと思っています。

森は、いろいろな環境が共存しています。そのたくさんの環境の複合体が「そと」として森というかたちで存在しているのです。そういう環境の複合体として建築をつくらうと思ったときに、森のような世界と表現しました。

木造について

石上さんは木造建築を手がけたことはありますか。木造建築についてはどのようにお考えでしょうか。

木造建築にはとても興味があります。いま、京都の建仁寺の両足院で毘沙門堂の増築の設計をしています。日本建築には増築と新築の境がない。ひとつのお堂を考えるにしても、増築の過程で新しい形式ができあがっていき、本体に対して付け足されたようには見えない。元からある建築を周辺環境と考え、もう一度その建物の空間形式や構造、全体性をつくり替えていくことがある。そんな柔軟性が軸組にはあると思っています。

建築の未来について

戦後70年が過ぎ、21世紀に入って20年以上経ち、世界においても日本においても、戦後民主主義の影は薄れ、社会構造に変化が見られます。そして2020年からはコロナ禍で世界中が疲弊しています。そうした社会変化は建築にどのように影響しているとお考えですか。

コロナ禍の前後で世の中の世界観はかなり変わったと思います。建築では屋外と屋内の考え方に大きな変化がありました。いま、徳

島県で県民ホールプロジェクトを進めているのですが、大半を半屋外空間にしています。これまで国内の公共建築で半屋外空間が認められることはまずありませんでした。使い方もわからないし、管理も難しいという理由からですが、コロナ禍をきっかけに建築の開かれ方に対する意識が公共建築においても変わったのは大きな進化だと思います。

それと、都市に住環境を求めなくてもよいのではないかという考えも出てきましたが、僕はそれが都市性を再考するきっかけになるのではないかと思っています。20世紀の都市像は、建築家によって多く提案され、それゆえ都市を建築的なスケール感で捉えていたため、都市＝建築、建築＝都市ともいえたのですが、現代では、都市と建築はスケール感としてすでに一致しなくなっているように思います。20世紀の人間のアクティビティのスケール感では都市とある程度一致していましたが、現代においては異なるように思います。僕たちは日常的に環境を意識し、地球のスケールで物事をイメージしているような気がするからです。だから、人間と建築が集まる環境という意味での都市のあり方はこれからさらに変わっていくのではないのでしょうか。都市は、もっと人間の尺度を超えた自然のスケールを含んだ大きさと範囲になっていくように思います。そのなかでの人間と建築の集合のしかたも当然、変化していくのではないのでしょうか。

石上さんは、「建築」とは本来どのようなもので、その「建築」は、この先、どのように変わっていくとお考えでしょうか。

最近特に考えるのは、建築が置かれる環境の前提についてです。建築がどのようなかたちで、人間を基準とした時間的・空間的スケールを超えた環境を前提として、存在していくことができるか。このことは、この先の「建築」を考察するうえでとても重要だと思います。時間的・空間的スケールを広範囲で考えるということは、既存の価値観の多様性の度合いも当然劇的に変化します。そのことによって建築の存在のしかたそのものも非常に多くの問題と可能性を同時に含むようになっていくのだと思っています。それらに対してどのように建築家は提案し解決することができるのか、はっきりとはまだわかりませんが、興味があります。

③ヴェネチアビエンナーレ2008。「ビエンナーレ日本館」の前庭に細いスチールの柱と薄いガラスでつくられた4つの温室を配置。既存の環境と連続するように地元の植物が温室の内外に植えられた。

④KAIT広場。KAIT工房に隣接して建つ。約4,000㎡の空間に59個の開口のある鉄板屋根が架かっている。開口部にガラスは入っておらず、日射や雨が直接入り込む。

⑤ポタニカルガーデン水庭。昔は水田であり現在は牧草地である約16,000㎡の敷地に、既存の水門から水を引いて160個の池をつくり、開発が決まった隣の森から318本の木々を移植して計画されたランドスケープ。

写真：junya.ishigami+associates

石上純也（いしがみ・じゅんや）
東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、妹島和世建築設計事務所を経て、2004年石上純也建築設計事務所を設立。主な作品に、神奈川県立工科大学KAIT工房・KAIT広場、Park Groot Vijversburg ビクターセンター、ポタニカルガーデンアートビオトープ「水庭」、2019年サーペンタインパビリオン、House & Restaurant など。2009年日本建築学会賞（作品）、2010年第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、毎日デザイン賞、2019年芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術部門）、OBEL AWARD など受賞多数。
写真：CHIKASHI SUZUKI



AGING WELL SHOW HOME

設計・施工：株式会社野澤工務店
写真：新澤一平
文：久留由樹子

SE 構法の実例



南側から庭越しに見る。右手前は塀の裏手にミニキッチンを仕込んだカウンターとプランターを設置。1階部分の外壁と同じ屋久島地杉で仕上げ、庭を部屋のように囲んでいる。造園はYup! (ワイナップ) の谷岡雄介さん。



庭も居室も等価な生活の場として

大工としての確かな技術を基に、建築士として長く住み継げる家のあり方を追求していくと、生活の場は外へと広がり、自然素材に包まれた強固な躯体は、まちなみをつくる佇まいとなった。

「AGING WELL SHOW HOME」は、株式会社野澤工務店が2019年からスタートした注文住宅事業「AGING WELL」のモデルハウスであり、常務取締役である野澤星羽さんの自邸でもある。兄で専務取締役の野澤万里さんとともにお話をうかがった。

大工であり建築士である強みを活かす

野澤工務店は1970年にふたりの祖父にあたる野澤義則さんが大工集団として創業したのが始まりである。2代目で現社長の野澤泰則さんが継ぐと、年間35棟の大工仕事をこなす工務店へと成長した。3代目を引き継ぐ万里さんと星羽さんは子どものころから週末は現場について行き、壁のボードを張ったり、断熱材を入れる手伝いを楽しみながら過ごしてきた。そして物心がついたころには大工を志していたという。高校を卒業すると、ふたりは社寺仏閣なども扱う、大阪・泉州地域

で有数の棟梁たちのもとにそれぞれ修行に出た。あえて外に出たのは、建売住宅など工法の簡易化が進み、大工の力量が求められる仕事が増えたことに疑問を感じたから。そしてふたりが修行から戻った6年前、法人化して現在の株式会社野澤工務店となった。兄弟ともに大工であり、建築士の資格も持つことを強みに、独自性を打ち出していく。そのひとつが注文住宅事業の「AGING WELL」だ。設計と施工を行き来しながらプランをつくり、「素敵に歳を重ねる」という言葉通り、素材にこだわった長く住み継げる家づくりである。「AGING WELL SHOW HOME」は大阪府泉南郡熊取町に建つ。熊取町は、江戸時代には農業と織物業が盛んで、昭和時代には繊維産業が発達した地である。1960年代には宅地開発が活発となり、農村型集落から住宅都市へと変貌していった。今も周囲には農村時代の名残を感じさせる水路があり、木々が茂るのどかな住宅地だ。明治時代から

左頁：ダイニングキッチン。ダイニングテーブルと一体となったアイランドキッチンや収納はすべて大工工事で制作。

上：ダイニングから玄関方向を見る。

下：リビングダイニングから庭を見る。手前のデッキを介して内外が緩やかに連続する。



の古い建物もまだ残っており、多世代の住宅が混在している。万里さんと星羽さんも熊取町で生まれ育った。この敷地との出会いは、実は南隣に建つ、野澤工務店で手がけた万里さんの同級生の家がきっかけだという。南隣の家の施工中に、畑だったこの土地が売りに出され、迷わず購入を決めた。

設計から家具づくりまで手がける

設計者にとって、分譲地開発でもない限り2棟並んで設計する機会は滅多にない。素材や色彩、高さやボリューム感など、「2棟並ぶことで伝えられること」を考え、小さなまちなみをつくるよう緩やかな連続感をもたせて設計した。自分たちで設計を手がけるが、現在は株式会社アトリエさんかかの谷口恋さんとタグを組むことが多い。大工ゆえに合理性や納まり

を重視するふたりに対して、思いがけない視点から提案をする谷口さんの存在が可能性を広げてくれるという。今回のL型プランもそうだ。敷地に沿うように北側と西側のボリュームが連なり、北側にLDKを、西側に水まわりと納戸を納めている。LDKから続く長い廊下は一方で庭に面し、壁面側には本棚をつくり付けた。突き当たりは机を設えた書斎で、賑やかなLDKから距離を取った離れのような場所となる。キッチンは大工工事で制作できるのもふたりの強みである。アイランドキッチンとダイニングテーブルを120mmのレベル差をつけてひと続きとして、天板もクリ材の同素材で、全体を木の塊のように仕上っている。収納の引き出しは既製品と造作の組合せだが、すべて造作することもあるという。「AGING WELL」では構法に決まりはなく、今回初めてSE構法を採用



左上：キッチンから見る。階段下には曾祖父の代から引き継がれた70年ものチェストが置かれる。手入れをして使い続けられることで、味わい深く古びるその姿が、野澤工務店の目指すAGING WELLである。

中上：廊下と連続する書斎。

右上：玄関。左奥はシューズクローゼット。土間で一体となつてつながる。

左：2階洋室前からホールとランドリースペースを見渡す。2階の壁はすべて間仕切り壁なので、取り払ってひと続きの空間にできる。

した。L字型は矩形より水平力の負荷がかかるので在来構法より強度のある架構が求められることと、多くの人が集う4,500×10,000mmのLDKを無柱にできることが決め手となった。

しかし手刻みの高い技術力をもつふたりが、なぜSE構法を選んだのかうかがうと、手刻みはどうしても微妙な誤差を許容せざるを得ないが、SE構法の金物とプレカットの集材は強度と正確さの点でより信頼できるという。納まりの正確さは気密性や断熱性にとっても有利であり、仕口の欠損が少ないことも選択の理由となった。

庭はランドスケープであり活動の場として、「AGING WELL」の家づくりで欠かせない場所である。三角形のデッキは、居室から庭へのレベル差を吸収しつつ段状に広がり、上部の深い軒は、適度な日陰を提供し、庭での滞在を快適にする。南側には植栽と一体となったベンチを設え、道路側には塀の裏側を家具化するようにミニキッチン

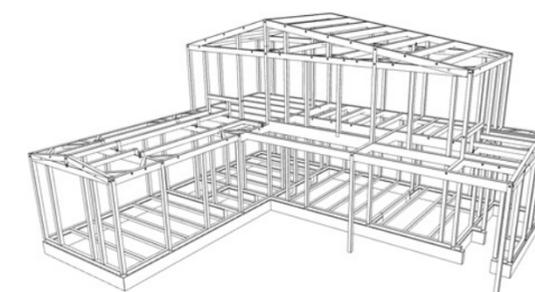
やプランターをつくり、庭を居場所とするきっかけをちりばめている。

住み継がれる家

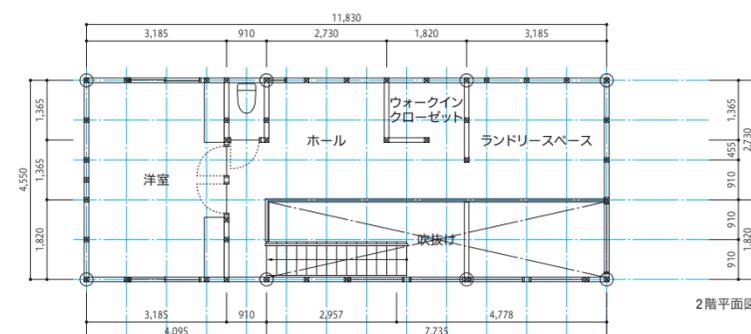
この家は、息子さんへ住み継ぐことを念頭に、店舗になるなどプログラムが変わることも考慮された。SE構法によるこの躯体では、吹抜け回りに増床したり、間仕切り壁を取り払って内装を変えることも容易である。また、断熱材にはシュタイコという透湿性のあるドイツ製の木繊維断熱材を用いている。木の呼吸を妨げないよう、内装も紙製のクロスとし、外壁も板張りや漆喰で仕上げている。フローリングには無垢材を使用し、自然素材を積極的に採り入れて、手入れをしながら使い続けられる仕様としている。高い強度を持つSE構法の躯体と、それを包み込む自然素材により、まさに「AGING WELL」の理念を追求する家となった。



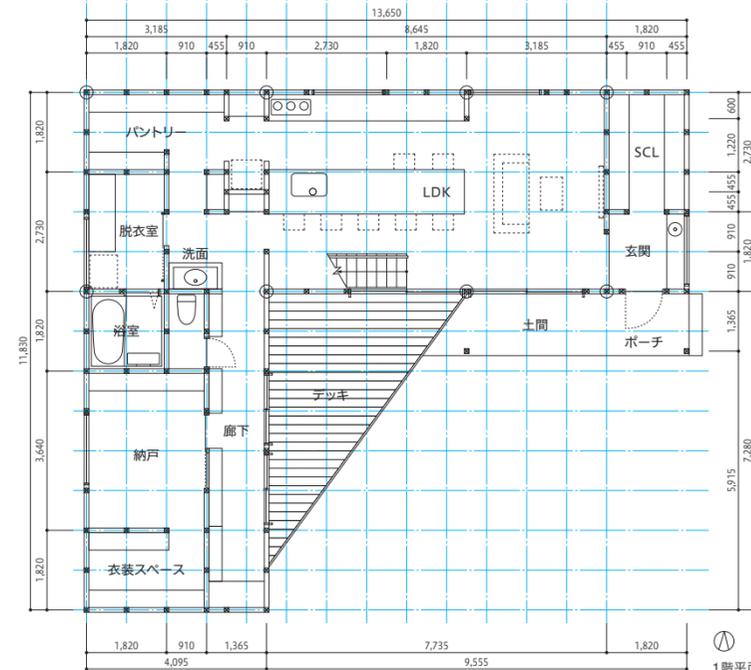
東側外観。家形の屋根の向きと外壁の素材を上下階で変えて、視覚的なボリュームを周囲に馴染ませている。



架構図



2階平面図



1階平面図
S=1:150

建物名称: AGING WELL SHOW HOME
所在地: 大阪府泉南郡熊取町
主要用途: 住宅兼モデルハウス
建主: 野澤星羽

設計・監理
建築: 株式会社野澤工務店
担当者名: 野澤万里、野澤星羽
構造: 株式会社エヌ・シー・エヌ
共同設計: 株式会社アトリエさんかく
担当者名: 谷口恋、酒井日生

施工
施工: 株式会社野澤工務店

敷地条件
用途地域: 第1種中高層住居専用地域
防火指定: 法第22条区域
道路幅員: 東側4m
駐車台数: 3台

構造・構法
主体構造・構法: SE構法(木造軸組構法)
基礎: ベタ基礎
杭: なし

規模
階数: 地上2階
軒高: 6,440mm
最高高さ: 7,815mm
主なスパン: 4,550mm 4,095mm
敷地面積: 271.84㎡
建築面積: 104.96㎡ (建蔽率: 38.61%)
延床面積: 134.55㎡ (容積率: 49.49%)
 1階: 91.91㎡ / 2階: 42.64㎡

工程
設計期間: 2021年7月~2021年9月
施工期間: 2022年3月~2022年11月

設備システム
空調
空調方式: 薪ストーブ、ルームエアコン
熱源: 薪、電力

衛生
給水: 公共上水道
給湯: エコキュート
排水: 公共下水道

電気
受電方式: 直接引込み

防災
熱・煙感知器



家具や照明、ファブリック、植栽など、生活に求められるコンテンツを提案できると、顧客の信頼度が増します。
この連載ではその道のプロフェッショナルがそれぞれの視点で案内します。

「天窓の活用で住宅のプランニングに大きな効果を」



天窓から得られるさまざまな効果のなかで、もっとも代表的なのが「採光」と「通風・換気」です。ご存知の通り建築基準法では、採光に有効な窓を住宅の居室では床面積の1/7以上設けることが定められています。その有効採光面積の算定時に用いる採光補正係数が天窓は原則「3.0」で、側窓(外壁面に設けた窓)の3倍の採光効果があるとみなされます(ただし、光井戸のように天窓と居室空間が離れている場合などは採光補正係数の算定が別途必要)。つまり側窓の1/3の大きさで規定の採光を得られるわけですから、いかに効率がよいかおわかりいただけるでしょう。開口部が小さければ、そのぶん熱損失も抑えられます。天窓の採光効果が高いのは、天空光をたっぷり拾うからです。自然光(昼光)は直射光、天

空光、反射光からなり、天空光は直射光と違って方向性がなく均一で、空の明るさの元となるもの。天窓の総面積を、照らしたい床面積の1/10程度で計画すれば、その居室内は曇りの日も日中は照明が不要、本が読めるくらいの明るさを得られます。通風効果については、天窓と側窓を組み合わせると、側窓だけの空間に比べて2~4倍になるといわれています。天窓は負圧になりやすいので風の出口とし、空間の反対側にあたる位置に風の入口となる側窓があれば、家の中に空気が流れ、夏の暑い日も体感温度が下がって涼しく感じ、エアコンの使用を抑えられる可能性があります。このとき、天窓と側窓の高低差があればあるほど通風効果は高まりますが、天窓の位置が高くなると照度は減少するので

ご注意ください。自立循環型住宅設計ガイドラインに示されている換気面積の計算法では、側窓は居室の床面積に対して1/10以上とあるところ、天窓は1/35以上。つまり通風・換気においても、天窓は側窓の1/3程度の大きさで同等の効果を得られるとみなされています。建て込んだ狭小地では、屋根の上に吹く風を導き入れる“ウインドキャッチ”として天窓を設けることも有効です。天窓を設けておけば、無風状態でも暖かい空気が上昇する性質を利用して(重力換気)、夏は天井付近に溜まった暖気をスムーズに排出できるので、帰宅したら冷房をつけるのと同時に天窓を開けておくことをお勧めしています。排熱により居室内部が冷えやすくなり、一方で冷たい空気は下降するので、天窓を開けてお



SE構法の登録施工店である大分のFDM株式会社が設計・施工した住宅。吹抜けの玄関ホールの真上にベルックス製の天窓を取り付け、1階にも自然光を届けるほか、2階の長手方向の片側は壁上部を連窓とし、ここにもベルックス製の天窓を採用。この連窓の一部は開閉可能で、反対側に位置する側窓を開けると通風が促される。窓と窓の間に板状のフィンを設置することで光がやわらかく室内に広がり、その影によるリズム感も生まれている。連窓はすべてブリーズブラインドが組み込んだタイプで、ブラインドを下ろせば直射光を拡散光に変えられる。(写真：梶原敏英)

でも逃げることはありません。

プライバシーを確保しながら開放的

ほかに、プランニングで壁面を有効利用できる、周囲が建て込んでいても隣の家と窓が向き合うことなくプライバシーを確保できる、といった点でも、天窓は設計者の皆さんから評価されています。窓の位置でその部屋の用途が外からわかってしまう事態を天窓なら避けられますし、カーテンやブラインドを閉めればなして暮らさざるを得ないというような、「無駄な」開口部をなくすることもできます。そしてなにより、空に視線が抜けると空間を広く感じられます。天窓使いが巧みな方は、天窓から入ってくる光を意匠としてどう活かすか、ということまで考えて設計されています。光のデザインにより、

日々の暮らしがドラマチックになり、住まい手だけが得られる驚きや喜びを提供できるという効果も期待できるのです。このような経験値をぜひ増やしていただきたいと思います。住宅用の天窓の製造会社は、国産・輸入を合わせて多いときは日本に20社近くありましたが、現在は日本ベルックスともう1社になりました(YKK APと三協アルミが扱う天窓はベルックス製)。昨今、雨漏りするとか夏暑いと問題になっている天窓は、玉石混淆だった時代に設置されたものが大半です。当社製品はデンマークの当社でさまざまな実験を重ねており、雨量が多く、台風の頻度も高い日本向けの製品は最高級の仕様です。さらに施工性にも優れ、箱から製品を取り出して屋根に開けた穴に載せたらすぐに設置できるようになっています。



東京都内に建つ中野さんの自宅は建築家の竹原義二さんの設計。さまざまな高さで天窓が設けられている。下の写真は、中央の写真の右上に写る場所の内部。この天窓からは夜、月や星を眺められる。

中野 要 (なかの・かなめ)
日本ベルックス株式会社 営業推進室
東京生まれ。1988年に日本ベルックス入社以来、天窓の効用、光や風による空間デザインの提案や情報発信、新規市場開発業務などを担当。天窓専門メーカーのベルックスは1941年にデンマークで創業、日本ベルックスは1981年に設立。
<https://www.velux.co.jp>



Report

第18回 重量木骨の家プレミアムパートナー総会を開催

写真：杵島宏樹



全国の重量木骨の家プレミアムパートナーが一堂に集り、資産価値の高い住宅を提供するグループとして結束を固めた。

第18回となる重量木骨の家プレミアムパートナー総会(以下、総会)を、沖縄県那覇市のダブルツリー by ヒルトン那覇首里城にて2023年3月9日に開催しました。コロナ禍で対面での開催を控えてから3年、今年は全国の登録施工店、資材メーカーなど各社から128名にご参集いただきました。

冒頭、株式会社エヌ・シー・エヌの代表、田鎖郁男から、新築注文住宅不振の時代のなかに

おいても、重量木骨の家のテーマである高付加価値、資産価値維持への取り組みを、ともに歩みを止めずに進んでいこうという挨拶で、総会が始まりました。

続いて、昨年開催した「重量木骨の家 ガレージハウスコンテスト」の表彰式を行いました。プレミアムパートナーからガレージハウスをテーマにした住宅を募り、集まった42作品から、各賞に選ばれた7作品を表彰しました。審査にあたったのは、構造家の池田昌弘氏、カー

ライフエッセイストの吉田由美氏、インテリアデザイナーの君塚賢氏の3名。グランプリなど3部門を受賞した株式会社星野建築事務所のほか、審査員個人賞など、入賞した各社に記念の盾を贈呈し、栄誉を称えました。次いで、エヌ・シー・エヌ 重量木骨事業部の中川勝人より、2022年度の取り組みの報告と、来年度へ向けての施策発表を行いました。前年度の成果として、数年来継続しているグリーン化補助金の利用枠の増加や、長期優良化住



左:ガレージハウスコンテスト表彰式でスピーチをする星野建築事務所の星野興行社長。中・右:エヌ・シー・エヌから田鎖郁男と中川勝人が登壇した。

宅取得比率の向上、省エネ性能のレベルアップなど、高付加価値商品を提供するグループとして、確実に成長を遂げていることを報告し、新年度は「選びぬかれた工務店と建てる、強く暖かく、こだわりがかなう家」をメインテーマに、さらにグループとしての強みをアピールしていくことを宣言しました。そのための戦略のひとつとして、住宅購入検討者層の拡張に向けて、土地探しから始めるユーザー層を取り込むという提案を行いました。ついてはランディ株式会社が開発・運営するSaaS型の営業支援システム「ランディ

PRO」をプレミアムパートナー各社へ導入します。本サービス採用の背景として、注文住宅の建築費と土地価格の上昇に加え、首都圏を中心に住宅用地不足に悩む声がありました。そのような状況で、デザインへのアプローチは継続しつつ、土地購入検討層に早い段階からアクセスし、建物提案へと導くことが狙いです。最後に、SE構法の品質を担う提携プレカット工場のなかから、本年は品質と性能で資材提供に尽力いただいた株式会社岡本銘木店 京都工場に感謝状を贈り、閉会となりました。

Information

非住宅木造建築対象 JAS 構造材を利用した助成金の募集がスタートします

2023年4月27日に(一社)全国木材組合連合会より、令和5年度 JAS 構造材実証支援事業が発表されました。本助成金は所定の要件を満たす非住宅木造建築に対して助成を得ることが可能な助成金制度です。対象となる木材製品は、JAS 構造材(機械等級構造用製材、構造用集成材、構造用LVL、CLTなど)を主要構造部材に活用した、非住宅建築物です。

※助成金の詳細は事務局HPをご確認ください
<https://www.jas-kouzouzai.jp/jigyou2/>

[2"×4"製材、CLT、集成材、LVL]→柱、壁、床、屋根、横架材
※目視等級製材のみの申請は対象外

■対象材料
構造用製材(機械等級製材)、2"×4"工法構造用製材、CLT、LVL、構造用集成材(中断面以上)、構造用合板、構造用パネル

■助成金額
助成上限額:15,000,000円(ただし、床面積1,000㎡以上、または4階建て以上の物件は30,000,000円上限)

■申請スケジュール
・事業申請:2023年5月8日~6月2日
・交付申請締切:2023年9月29日

上記以外に諸条件がありますので、申請時には必ず申請者自身で募集要項を確認の上、お申込みください。エヌ・シー・エヌではSE構法を採用いただいた案件については、助成金申請サポートを行っています。非住宅木造の構造設計・材料供給・助成金について、お困りの方はお気軽にお問い合わせください。

問い合わせ先
株式会社エヌ・シー・エヌ 特建事業部
Tel. 050-1780-0262

Notice

SE構法技術研修会

SE構法技術研修会をE-Learning(オンライン)にて実施しています。現場施工に照準を絞り、実際の現場の流れに沿って事例を交えて解説いたします。工務ご担当の方をはじめ、設計、営業のご担当者様もぜひともご参加下さい。

■開催日程
第184回
2023年7月1日(土)~7月14日(金)
※お申込み期間
2023年6月1日(木)~6月10日(土)
第185回
2023年8月1日(火)~8月14日(月)
※お申込み期間
2023年7月1日(土)~7月10日(月)

上記期間中におよそ5時間の講義をオンラインで受けていただけます。修了試験もオンラインで行います。

参加費:20,000円(消費税込)
参加希望の方は下記のURLよりお申込みください。
<https://business-online.ncn-se.co.jp/workshop/>
定員は各回35人です。お早目のお申し込みをお勧めします。ご不明な点は、エヌ・シー・エヌの営業担当者までお問い合わせ下さい。



Information for Constructors Network SE

ネットワークSE 187号
2023年5月発行【隔月発行】
発行者 田鎖郁男
マネージメント 安藤幸子(エヌ・シー・エヌ)
編集長 橋本純(ハシモトオフィス)
編集 長井美咲 / 久留田樹子
デザイン 橋本祐治(Bushitsu)
図面トレース 長谷川智大
印刷 山田写真製版所

表紙写真:杉野圭
株式会社エヌ・シー・エヌ
〒100-0014
東京都千代田区永田町2-13-5 赤坂エイトワンビル7F
TEL. 03-6897-6311